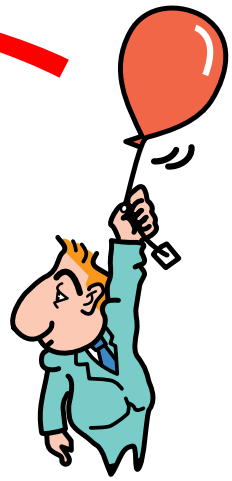
第六回
日本語スピーチコンテスト



（テーマ）

❶日本って、どんな国？
❷現実化する気候変動に思うこと
❸コロナ禍で思うこと
❹自由課題

港ユネスコ協会

第六回
日本語スピーチコンテスト

日時	2022 年 12 月 11 日（日） 午後 1 時 30 分～午後 4 時 00 分
会場	港区立男女平等参画センター リーブラホール
主催	港ユネスコ協会
共催	港区教育委員会
協力	玉川大学ユネスコクラブ

目次

１．ご挨拶
外国人による日本語スピーチコンテスト開催に当たって
港ユネスコ協会会長　田部　揆一郎

２．第六回日本語スピーチコンテスト開催に寄せて
東京インターナショナルスクール理事長　坪谷 ニュウエル 郁子（審査委員長）
玉川大学教授 ユネスコクラブ顧問　小林　亮（交流会企画実施）

３．スピーチ
(1) ガネッシュ　ミテュラン　（インド）　「インドの教育制度」
(2) Hla Yamin OO　（ミャンマー）　「自立」
(3) 李　俊憙　（中国）　「万巻の書を読み、万里の路を行く」
(4) ギュリ　キム　（韓国）　「私の日本、皆の日本」
(5) Dhea Ceicarya Ferennita Langitan（インドネシア）「成功」
(6) 杜　建奥　（中国）　「日本文化の輸出」
(7) Bhatt Suresh　（ネパール）　「わたしと日本」
(8) イムロン　アブドラモノフ（ウズベキスタン）「ふるさとの海から考えること」
(9) 趙　麗君　（中国）　「感謝」
(10) Dineshkumar Prabakaran（インド）　「静かな国　日本」
(11) Oblokulov Ravshan Sobirjon Ugli（ウズベキスタン）「あこがれの国」

４．　会場見学者とスピーカーとの交流会

５．審査委員

６．審査基準

７．審査結果

８．表彰式

９．閉会の辞
港ユネスコ協会　相談役　菊地賢介

10．ひとこと
港ユネスコ協会　副会長　今村孝子

１．ご挨拶

外国人による日本語スピーチコンテスト開催に当たって

港ユネスコ協会会長　田部揆一郎

当日は、年末のお忙しい中を、武井区長、浦田教育長をはじめ多くの方のご来場を賜り、大変盛り上がったコンテストになったと思いました。

今回は、11 人の外国の方が、日本でご体験になったこと、お感じになったことなど、日本語でお話しいただきましたが、大変興味深く聞かせていただきました。

まず感じたことですが、日本語は外国人にとってかなり難しい言語ではないかと思うのですが、その日本語を使って立派な内容のお話しをされたことに大変感心致しました。

また、毎年感じることですが、私ども日本人が日頃当たり前と思っていること、気づかずにいることを取り上げてお話しいただきますと、改めてそのような見方があるのかと、感心させられます。

さらに何人かの方からは、いずれお国に戻られ、それぞれのお国と日本との貴重な架け橋として活躍したいとのスピーチもありとても頼もしく思いました。このような方が、いずれ日本のよき理解者として、いろいろな分野でご活躍になるのがとても楽しみです。その意味で、毎年のこのコンテストは、とても意義深いものと思います。

今後とも、このイベントを益々拡充していきたいと思っております。

2.　第六回日本語スピーチコンテスト開催に寄せて

東京インターナショナルスクール
理事長　坪谷 ニュウエル 郁子

去る令和４年１２月１１日、第６回日本語スピーチコンテストが港区男女平等参画センターリーブラホールで行われました。今回は１１名のスピーカーの皆さんを迎え、心のあたたまる話を聞かせてもらい、審査員一同、感激いたしました。

インドの教育制度について教えてくださったガネッシュさん、お母様のコロナ感染を機会に本当の自立の意味を知ったラヤミンさん、読書からの学びを語ってくれた李さん、ユーモアたっぷりに日本が大好きとギュリさん、留学生としての大変さを正直に話してくれたランギタンさん、日本の文化発信の戦略から母国も学びをと杜さん、日本と母国ネパールの架け橋を目指しているバッタさん、ウズベキスタンから海が消えてしまう問題を投げかけたイムロンさん、感謝の気持ちの大切さに気づいた趙さん、日本人の静かさに深い考察をしたプラバカンさん、そしてお母様の憧れの国であった日本に来て、さまざまな経験を得ながら成長を続けるラウシャンさん。どのお話も誠実で率直で、そして何より心がこもっておりました。私たち審査員一同も、話を聞きながら感心したり、涙が出そうになったり、本当に素晴らしいお話をありがとうございました。

私たちはみんな一人一人違っています。誰も同じ人はいません。そして一人では誰も生きていけません。誰もが誰かに支えてもらいながら生きています。みんなで手を取り合って、助け合っているから世界は回っていくのです。それを実感した日となりました。

1+1 は１０にも１００にも１０００にもなります。このコンテストを通じて、互いの違いを乗り越えて、みんなでより良い、より平和な世界を目指していけるのだという希望と力が漲ってきました。そして何よりこうして顔を合わせて同じ時間を共有することの大切さをしみじみ感じた日でもありました。

審査員一同にとっては、参加した皆さんに一等賞を差し上げたかったのが本音です。

スピーチをしてくださった皆様、またご挨拶をしてくださった武井区長、最後までお付き合いくださった浦田教育長、ワークショップを開催してくださった小林先生と玉川大学の皆さん、そしてこの日のために一生懸命準備をしてくださった港ユネスコ協会の会員の皆様、本当に、本当にありがとうございました。また来年のコンテストでお目にかかれることを楽しみにしております。

二つのリアリティ
― 「第六回日本語スピーチコンテスト」 に参加して ―

玉川大学教授 ユネスコクラブ顧問　小林　亮

港ユネスコ協会が 2017 年から毎年継続して実施してこられた「日本語スピーチコンテスト」も今年で 6 回目となります。2022 年 12 月 11 日にリーブラホールで開催された「第六回日本語スピーチコンテスト」は多くの参加者が集う盛況の会となりました。このすばらしい異文化理解イベントを実現された港ユネスコ協会に心からお祝い申し上げます。あわせて、これまでに引き続き玉川大学ユネスコクラブの学生たちに交流会のファシリテーターを務めるという貴重な体験学習の場をご提供下さいましたことに厚く御礼申し上げます。

今年の第六回日本語スピーチコンテストでは７か国から 11 名のスピーカーが登壇されました。12 歳の少年から 34 歳のビジネスマンまで世代も地域も多岐にわたる登壇者のラインナップでしたが、今年はどのスピーチも聴く者の心に染み入る聴きごたえのある内容で、とりわけレベルの高いスピーチコンテストであったと思います。審査委員の先生方も賞を決めるのに本当にご苦労なされたのではないでしょうか。

今年のスピーチ内容が充実していたのは、もちろん各出場者の方々の優れた資質によるものであることは間違いありませんが、あわせてロシアのウクライナ侵攻をはじめとする厳しい国際情勢が背後にあったことも一因としてあったのではないかと思います。世界の平和や持続可能性が脅かされている現在の状況だからこそ、「平和の文化」の価値を見直し、お互いの文化の相互理解を進めることの重要性が切実に認識され、質の高いスピーチの実現につながった側面もあるのでないかと感じました。

人類は生物学的には「ホモ・サピエンス」という単一の種ですが、国家、人種、民族、政治的イデオロギー、宗教信仰などによってさまざまに分断され、対立や葛藤が世界各地で起きています。たしかに国際報道で伝えられる国際政治の現状は、国益や民族アイデンティティが激しくぶつかり合い、対立が尖鋭化する憂慮すべき情勢で、これはきれいごとではすまない厳しいリアリティです。しかし日本語スピーチコンテストの交流会で、各国から来られたスピーカーの方々と会場参加者とが国や民族の違いを超えて親密な対話を深め、一人の人間としてわだかまりのない友情を育む様子を見て、これももう一つのリアリティなのだと実感しました。厳しい対立と一切の分断を乗り越えた真の友情、このどちらもが人間社会のリ

アリティなのです。これは矛盾を内包する人間性の反映なのかもしれません。しかし今回の第六回日本語スピーチコンテストに参加して、それでも私たち人間は本質的に国や文化の違いを超えた相互理解と和合とを求める価値のベクトルを内包した存在なのだということを改めて確信することができました。この確信こそがユネスコの理念を支える原動力にもなっているのではないでしょうか。港ユネスコ協会が実施されたこのイベントは困難の中でも失われない人間のそうした本源的価値にあらためて気づかせてくれる真に意義深い、そして同時代的な集いであると思いました。港ユネスコ協会の平和貢献に心からの拍手をお送りさせて頂きます。

３．スピーチ

（１）「インドの教育制度 」
ガネッシュ　ミテュラン

こんにちは。私はインドから参りましたミテュランと申します。日本のインドのインターナショナルスクールに通っています。よろしくお願いします。

今日はインドの教育制度についてみなさんにご紹介したいと思います。世界第２の人口をもつインドには２８の州と８つの連邦があり、２２種類の言語が使われています。特に英語は重要な役割をもっており、公用語はヒンディー語です。教育手段は州によって違います。

小学校から高等学校までは１２年間で、日本と同じです。しかしその詳しい内容や分け方は日本とは違います。幼稚園では、こどもにアルファベットを砂に書かせることから始めます。充分に練習したら、粘土の鉛筆で木で作られた板に字を書く練習に移ります。これは濡れた布で消す事ができます。紙に書くのとは違ってすぐに消えてしまうので、子どもたちは小さいころから暗記をする習慣がつきます。

次は６歳から 11 歳までの小学校と上級小学校の教育についてご紹介します。子供たちが文字が書けるようになったら、こどもは子音と母音の組み合わせ方や物の呼び方を学び、算数の勉強に入ります。

次に 12 歳から 15 歳までの中学校と上級中学校の教育についてご紹介します。インドの教育委員会は複数あります。例えばＣＢＳＥ、ＩＢと州単位の機関です。ＣＢＳＥとＩＢは英語教育に力を入れていますが州の機関は一般の教育を中心としています。この段階は将来続けたい教育程度や学習したい分野を選ぶ時期です。

高校は２年間で、１６歳と１７歳です。高校のクラスは３つに分類されます。科学、商業、コンピューターです。学部に進学する場合、成績優秀者は医者かエンジニアを目指します。点数が足りない人は自分の好きな美術や料学コースを選ぶ傾向があります。インドでは学部の場合、基本的には４年間ですが、美術の専攻は３年間だけです。医学部は５年間です。

大学院は、工学のような専攻の修士課程は二年間です。学生は自分の適する領域や興味のある分野によってコースを選びます。インドで博士号をとりたい学生はそれぞれの分野で修士号をもっていなければなりません。博士課程は３年ですが最大６年で卒業しなければなり

ません。このほかに最近ではネット教育や通信教育があります。テレビ放送などによる講義で遠くはなれたところの人でも教育を受けることができるようになりました。

これで私の発表を終わります。どうもありがとうございました。

（2）「自立」

HLA YAMIN OO（ラ ヤミン ウー）

皆さん、『自立』と聞くと、どんなイメージがありますか。―なんでも自分で決める。一人で生きる。お金の面で、親に頼らない。―そんなイメージがありませんか。私もそんなイメージを持っていました。

コロナの前の私は、どこにでもいるような親に甘えてばかりの頑固な子供でした。学業のことでの悩みはありましたが、親を手伝うことを考えることもなく、毎日を楽に生活していました。でも、コロナはそんな私の人生を変えました。

皆さんもご存じの通り、ミャンマーは内戦中です。コロナで大変な中に、政治の問題によって、火に油が注がれ、自分の身を自分で守らなければならなくなりました。そんな中、家族全員がコロナに感染しました。もちろん、私もです。幸いなことに私と 11 歳の妹は、早く回復することができましたが、母はそうではありませんでした。緊急治療が必要な状態なのに、入院もすぐにはできませんでした。母に頼りっぱなしだった私は、走り回ることになりました。母が入院しても、医者にお願いすることはできません。人手もありません。電話で医師からの指示をもらい、必死で看病。その合間に妹の面倒。看病、家事、看病、家事。寝る時間もありません。「私がなんとかしないと、家族が死んでしまう！」そんなプレッシャーを感じる地獄のような毎日でした。そんな中、祖母が自宅で亡くなったと連絡を受け、ショックを受けました。「どうしたらいいのかわからない。自分はダメな人間だ」そう感じていた時、叔母が病院まで料理を届けに来てくれたと連絡が来ました。病院の窓の外を見ると、叔母が「頑張って！！諦めないで！！」とでもいうように手を振っていました。私は涙が出ました。叔母だって大変です。そんな時に私たち家族のために料理を届けてくれたことに胸がいっぱいになりました。

「応援してくれる人がいる。一人ではない。」振り返れば、国中が大変な時に入院するお金を貸してくれたり、気遣いの言葉をくれた友達がいたり、薬などを見つけてきてくれた人がいたことに気づきました。「どうして、私は一人で全部頑張らなきゃいけないと思っていたんだろう」と考え、人は一人では生きられないという言葉の意味を実感しました。困難な

日々を乗り越えたことによって、甘えてばかりだった私は、どこかに行っていました。

幸運なことに母は回復し、私の夢だった日本留学を実現することができ、今、この場に立っています。

日本に来る前、私は「あの日々を乗り越えた私だ。何でも来い！」と自信満々でした。しかし、日本に来てからは、何もかもが初めてで、話し合える友達もいません。人波の中で寂しさを感じ、ホームシックになりました。今さら、帰国なんてできません。だから、“私がミャンマーで学んだ自立”とは何にか、改めて自分に問い直しました。目が覚めました。

先生たちの助け、緊張している私に話しかけてくれたクラスメイト、優しく教えてくれるバイト先の先輩たち。そして、通りすがりの私に「こんにちは」とあいさつしてくれた工事現場のおじさん。私の周りには、たくさん、助けてくれる手がありました。

「自立とは何ですか」

私にとっての「自立」は、ほかの人の助けを受けずに、一人でなんでもできるようになることではありません。人の、周囲の助けをもらいながら、自分に何ができるかを考え、頑張っていくことなのだと、ミャンマーでの経験、日本での出会いを通じて気づきました。だから私は、それを忘れず、「自立」した立派な大人として、前向きに歩いていこうと思います。

（3）「万巻の書を読み、万里の路を行く。」

李 俊熹（リ シュンキ）

皆さんは、「万巻の書を読み、万里の路を行く。」という中国の諺をご存じですか。これは、「一万冊の本を読んでたくさんの知識を得て、一万里の道を旅してたくさん体験を積む」ことの大切さを教えている言葉です。

昔の私は内向型の人でした。自分の感情を表すのもできなくて、他人とのやり取りも苦手で、友達が出来るどころか、話す相手もいませんでした。そんな日々で、付き合ってくれたのが文学です。でも、幼い時、私のそばにあった本は、『論語』や『荘子』など中国の哲学と呼ばれる本ばかりで、私にとっては、時間をつぶすというか、あまり楽しくもなく、理解ができないものをただひたすらに読むといったものでしかありませんでした。

高校生の時、もうきっかけは覚えていないのですが、日本文学との出会いがありました。『人間失格』です。高校時代、私は、「自分はダメな人間だ」と思い、いろいろと落ち込むことが多く、『人間失格』とはどういうことだろうかとタイトルに惹かれました。読んで驚きました。今までになかった感情が生まれたからです。驚かれるかもしれませんが、この本を読んで、落ち込む必要はない、自分はまだまだ可能性がある、と気づかされたのです。

それから日本文学に興味を持ち、いろいろ読みました。『羅生門』『ノルウェーの森』『吾輩は猫である』『こころ」『斜陽』・・・・。

本を読むと、自分は本の中の人達と共感し合い、彼らと一緒に時間を過ごします。自分の年齢や立場に関わらず、本を通じて、自分が経験したことが無かったことや出会うことがなかった心境を本の中の人物と一緒に様々な経験をしました。

例えば、芥川龍之介の『羅生門』では、悪いことをした人に対して、責める一方ではなく、相手の背景、その時の状況、気持ちを考え、なぜそんな選択をしたのか、もし私もその窮地に置かれたら、同じ選択をしたのかと考えるようになりました。村上春樹の『ノルウェーの森』では、大切なモノを失ったとしても、それを受け入れ、歩む主人公の姿に、未来に対する漠然とした不安を持ったり、問題があったりするのは、生きていれば当たり前のことだと思えるようなりました。日常で起こることを受け止めながら生きればいいと思えるようもなりました。更に、夏目漱石の『こころ』や『吾輩は猫である』といった本を読むことを通じて、他の立場から人間という生き物を見て、自分は一体どういうものなのか、どういう人間になりたいのか、その為にやるべきなのは何なのか、してはいけないことは何なのかを考え始めました。その様々な物語を読むことを通じて、自分の心が豊かになっていることに気が付きました。視野が広がり、自分のことだけでなく、相手の立場に立って考えられるようになった自分がいました。人との付き合い方にも変化が生じました。相手が何を考えているかわからず、おびえていた自分は、いなくなっていました。文学作品を通じて、人の感情を知ることができたからです。

本はいいものです。好きな作品を発見したら、何度読んでも飽きてきません。どのページから読んでも自由に享受できます。その一つ一つの文字を見て、本の匂いをかぐだけでも幸せな感じがします。私にとって、本は私の城であり、心の避難所と言っても過言ではありません。

今の時代は皆生活が忙しくて、小説などより専門書を読んで資格を取ることが大事だと思う人がいるかもしれません。でも、そんな忙しい日々の中で、文学作品を読むことを通じて、疲れた心身に休ませて、心を豊かにするのもなかなか良いことではないでしょうか。

「万巻の書を読み、万里の路を行く。」

これからも、文学作品とともに人としての経験を積んで、心の豊かさを培いたいと思っています。

（４）「私の日本、皆の日本」
ギュリ　キム

はい、皆さん、こんにちは。今日はまだ日本のことをよく知らない、それと日本がまだ”よさそう、楽しそうな国ランキング”トップ３位に入ってないかもしれない皆さんに私が経験してきた日本での様々な冒険と暮らしながら感じた日本の良さを知ってもらい、その３位以内まで入らせるためスピーチをしようと思っています。私は幼い頃から母国の韓国ではなく日本、マレーシア、フィリピン、そしてまた日本で暮らしてきました。なぜ日本が２回も出てきたのか？それは私が 4 歳から４年間大阪に住んでいて、その後、マレーシア、フィリピンに引っ越し、そしてまた一年半前に京都に戻ってきて、それから今年、東京に引っ越してきたからです。はい、知ってます、知ってます。私が言うのもなんですけど自分の人生結構複雑なんですよ。まぁ、それはおいといて、本題へと。

私は関西で５年、そして東京で半年暮らし、たくさんの冒険ができました。関西では友達と生まれて初めてのカラオケに行ってみたり、ゲーセン、ゲームセンターに行ったり、USJ に行ったり、梅田のアウトドアアイスリンクで滑ったり、阪神タイガースの試合を見に行って優勝した時の感動を一緒に共有できたり、負けた時はお互い慰め合ったりしました。クラス全体で神戸にある須磨ビーチで遊んでひどい日焼けして、お互いの変顔を見ながら笑い合ったり。カラオケ、ゲーセン、アイスリンク、ビーチは確かに他の国々でも楽しくできるものではありますが、カラオケではレンタルコスチューム、アニメとのスペシャルコラボ、塗り絵コーナーみたいな面白機能や、ゲーセンでは日本独特の商品・ゲーム、プリ、アイスリンクは滑りながら見る風景、そしてビーチは泳いだ後食べるかき氷、焼そばなどと日本でしかできないことがたくさんあります。

お正月は京都の八坂神社に初詣行ったり、京都の美しさを感じるため清水寺や、稲荷神社、金閣寺、銀閣寺、嵐山を毎月訪問したり。あぁもう、その景色を思い出すだけで涙目になってしまう！！春の暖かい日差しとちる桜が清水寺を囲んだ時、そこから見る街の風景と京都タワーはどの宝石よりも輝くんです。夏は銀閣寺。青空と緑、池に映ったもう一つの銀閣寺。秋は絶対嵐山！トロッコ列車や川下りをしながら楽しむ赤くて燃えているような山。そして冬。時々顔を見せる青空と、真っ白でふかふかな雪が乗っかっている金閣寺。鳥の鳴き声を聞きながらストレス解消ができるヒーリングスポットでもなります。

そして特にお伝えしたいことは近所のおばちゃんのことです。関西のおばちゃん達は世界一とも言えるほど優しいんです。会う度に飴ちゃんやお菓子くれたり、落ち込んでいる時は声かけてくれて元気付けてくれたり、街で一番美味しい和菓子屋をおすすめしてくれたり。親切でありながら陽気な性格を持っている、とても明るい人たちばかりでした。

東京でもこの半年間楽しいことをいっぱいしてきましたよ。友達とアニメイト・ジャンプショップツアーに行ったり、渋谷にある麦わらストアでアニメ：ワンピースのグッズ爆買いしたり、イベントに参加したりとアニメ好きな人たちにはたまらない物がたくさんあって、お台場で自由の女神の真似して写真撮ったりしました。

あ、それとまた東京でも親切おばちゃん達いっぱい見つけましたよ！関西のおばちゃんとは性格や趣味の違いが結構あったんですけど優しくて陽気なとこはほぼ同じでした。

そんなふうに日本の一番良かった点は誰にでも優しく話かけてくれるおばちゃんがいること、たくさんの遊び場があること、めちゃくちゃ便利でどこでもすぐ簡単に行ける交通機関、そしてどの四季の風景とも似合い輝く京都アンド神社やお寺です。まぁ電車は時々事故が起こって遅刻したり、人が多すぎることなどたまに問題もありますが、私が今まで暮らしてきた国々の中で一番住み心地よいと思う国は日本です。皆さん、どうでしたか？私のスピーチを聞いて、日本はあなたの”よさそう、楽しそうな国ランキング”トップ３位に入りましたでしょうか？

そしてこの質問を特に韓国人の皆さんにも聞きたいと思います。あなたの日本への意見や想いは変わりましたでしょうか？良いところを知ってもらえたでしょうか？実はこのスピーチ、日本と韓国の関係をより良くするためにも書いたんですよ。私は日本が好きです。大好きです。ですからこの日本の良さと私の気持ちを、母国の人にももっと知ってもらい、日本が好きになってくれたら私は非常に嬉しいです。

（５）「成功 」

デェア　チェイチャリ　フェレンニタ　ランギタン

留学生にとって、日本はシンガポール、オーストラリア、アメリカ、ドイツ以外に留学先の一つです。留学生に聞いたらなぜ日本に留学するのですか?答えはたくさんあると思います。一つの答えは、夢を叶えたいということです。

夢について話すのは面白いのじゃないですか?そして、「あなたの夢は叶いましたか?」と聞きたいです。それが実現したなら、私はあなたたちに「おめでとうございます」と言いたいです。あなたが過去に費やした努力のために、あなたは今成功に値します。そして、まだ夢が実現していない人にも「おめでとうございます」と言いたいです。その夢を実現するためにあなたがした小さなことは、感謝すべき小さな成功です。

あなたの成功が他の人に評価されなかった時、今までしたことがありますか。たとえば、社会人は、目標に到達するために残業まで苦労し、最終的に終了しましたが、上司の応答は「次回はもっと早くしてください」だけです。テストの点数や良い大学に入学できるが、両親の返事は「もっと勉強してね！」という高校生と、日本語が少ししか話せない私たち留学生にとって、日本人の返事は「日本語は素晴らしい、とても上手ですね」と驚きました。これは本当に褒め言葉ですか褒めすぎじゃないかなと思ったことがあります。

私が言いたいのは、誰かが何かを達成するためにどれだけの努力をしたかわからないことがあるということです。高価なプレゼントは必要ありませんが、感謝されて「おめでとうございます」と言われたとき、それは私にとって素晴らしいプレゼントです。私は日本に 2 年間住んでいます。2 年間でさまざまな日本の文化を学びました。それが学校とバイトからもらって学びました。私はコンビニでバイトしていますが、様々なお客様に会いました。子供からおばあさんかおじいさんのお客様は買い物をするためにコンビニに来ます。コンビニに来るたびにおばあちゃんのお客様が元気かと聞いてくれました。「大丈夫ですか?」「これ、どうぞ、あげるわ」しかし、お客様から物をもらうのは良くないので断りましたが、おばあちゃんはいつも「おばあちゃんから何かもらったらすぐありがとうございますって言って欲しいよ、今日も頑張ってるからね」と言いました。

コロナで日本に行けるようになるまで 1 年待たされ、N2 レベルの日本語能力試験に 2 回合格せず、4 日に 3 度目の受験をしたので、いつも自分が一番不運な人だと思っています。再度合格しなければ、4 回目となります。しかし、私は非常に間違っていました。失敗の背後には、私たちが学ぶことができる教訓があるはずです。私たち自身が自分自身を大切にしていない場合、他の人は私たちをどのように評価しますか?

（6）「日本文化の輸出」

杜 建奥（ト ケンオウ）

突然ですが、「何で日本文化のように世界に流行することはできる文化が少ないのですか？」ということを皆さんは考えたことがありますか？今日は、この問題に対する私の考えを共有したいと思います。

日本は文化大国として、長い間、自国の文化を着実に世界に輸出しています。マンガ、アニメ、ゲーム、音楽、ファッション、文学、食文化など、世界の人々にとって身近なものになっています。

まずは日本料理店を例に挙げましょう。実は、日本のどこにでもある日本料理店は、私の国では高価な代表とされています。デパートには基本的に１、２軒の日本料理店があります。料理は当然ながらとても高価ですが、とても人気があります。どうしてでしょうか。なぜなら日本料理は口よりも目と耳に対する作用が大きいからです。高級な食材に加えてきれいな見た目。これらの要素があれば、味を問わず目を引くのに十分です。自分の強みを理解し、自分の特徴を際立たせることが、日本料理のような日本文化が世界的に知られている理由の一つだと思います。

みなさんは、ラーメンの起源、実は中国にあるのこと、ご存じですか？起源は中国ですが、日本料理として知られています。なぜでしょうか？ラーメンを筆頭に、日本人の日々の食生活には、原型は海外からの料理の物が数多く見られます。ハンバーグ、パスタ、カレー、トンカツ、オムライス……日本食と思われていたものが、実は日本以外の国から来たものだったとは、想像もつかないでしょう。これは日本文化のもう一つの大きな特徴だと言わざるを得ません。積極的に他国の文化を勉強し、自分の特色のあるものに転化する。傲慢にも外国文化を拒絶するのではなく、謙虚に学び、自らの特性を取り入れ、同化していく。日本のように、このようなことができる国は、世界でもほとんどありません。それが、日本の文化がこれほど普及した理由の一つだと思います。

皆さんは、日本のマンガを読んだことがありますよね？日本の文化を題材にしたゲーム、マンガ、アニメに多く触れて、これも多くの人が日本文化に興味を持つ理由の一つです。例えば、非常に有名な「NARUTO」は、日本の忍者文化を改編したものです。この作品によって、多くの人が日本の忍者に目を向けるようになりました。私の中では、伝統的なものの多くは、とても理解しがたく、つまらないものでした。でも、『NARUTO』を読んだ時、「忍者文化という昔のものをこんな風に表現できるなんて、本当に面白い。」と思わず感心しました。『NARUTO』のような作品は、日本の伝統文化を楽しむことができます。日本文化だけではありません。世界中の人が日本が改編した『三国志』のゲームや漫画などと通じて、中国の歴史に興味を持つようになりました。これは日本文化の第三の特徴、「大衆化」だと思います。

このように、伝統文化とアニメ、伝統文化と漫画、伝統と最新のファッションを融合させ、昔から続く伝統文化もおしゃれ好きな若者に受け入れられるようにしています。伝統を保存しながら、自分のものを誰にでも楽しめるものに変換し、強制的ではなく、選択権はすべて受け取り手にゆだねています。そうすることで、日本は伝統的な文化を若者や外国人にも身近に感じてもらっています。

日本が世界に与えた影響はそれだけではありません。みなさんもご存じのとおり、世界で

最も売れているゲーム機である任天堂のスイッチとソニーのプレイステーション 5 は、日本発のゲーム機です。また、5 億部を突破した「ONEPIECE」は、漫画の累計発行部数でギネス記録を更新しています。黒澤明監督が作った武士の映画は、ハリウッドの映画製作者に与えられた影響は今までも消えていません。

日本は、国土面積が小さい島国でありながら、世界中の食、娯楽、文学、芸術など多くの分野に影響を与える文化を創造することができる国です。世界には１９６の国があります。でも、大国といわれる国でも、その国の文化が、これほどまでに普及し、人気を博していないのはなぜでしょうか。これは、熟考に値する問題だと思います。私は日本の文化輸出が『うらやましい』。

自分自身の文化を残したまま変化して時代の流れに乗る、日本の文化輸出の在り方ついて、中国だけではなく、世界中の国々が学ぶべきことだと思います。皆さんも自分の国の文化を日本のような文化輸出ができないか、考えてみませんか。

（7）「わたしと日本」
BHATT SURESH（バッタ スレシュ）

皆さん、こんにちは。私は江戸カルチャーセンター日本語学校のバッタ・スレシュと申します。今日は〝わたしと日本”というテーマでスピーチをさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。ネパールの高校の歴史の教科書に、日本がどのように紹介されているか知っていますか。GDP が世界で 3 番目であること、世界で一番、平均寿命（じゅみょう）が長いことはもちろんですが、なにより大切なのは、ネパールにいろいろな支援をしてくれている国だということです。例えば、ネパールの新しい民法は、日本の JICA（ジャイカ）の支援を受けて作られました。今でも、日本は他の法律に対してアドバイスを与えたり、裁判所に対して研修を行ったりしてくれています。また、インフラ整備や作物（さくもつ）を育てることが難しい場所でも育つ種（たね）を支援してもらい、畑の改良（かいりょう）も行われています。日本留学への奨学金もあります。私は、高校生の時、日本がネパールに対してしてくれたことを知り、絶対に日本に留学するんだと決めました。

ところで、皆さんは、ネパールがどんな国かご存じですか。少し私の故郷（ふるさと）をご紹介します。私が生まれた場所、西ネパールのバイタァディは、自然が美しい場所です。

でも、そこは電気が通っていません。水道、ガスも、もちろんなく、食べ物も十分にはありません。子どもたちは家から 2 時間、歩いて学校に行きます。この状況は、私が生まれてから、今まで変わっていません。ネパールでは、大人になると、貧しい家庭（かてい）はインドへ行きます。お金持ちの家庭は、日本やアメリカなどへ行きます。そして、その国の国籍をもらうために死ぬほど頑張ります。なぜなら、外国に住むと自分たちの生活レベルが上がるからです。でもそれによって、私たちの国、ネパール自体が良くなるわけではありません。私は、外国の暮らしに目を向けることで、自国の悪いところにずっと蓋（ふた）をしているのではないかと感じました。だからこそ、戦争の後、急速な経済発展をした日本に「あこがれ」を持ちました。

日本に来て、気が付いたことは、日本人は仕事をする時は、集中して頑張って仕事をしているということです。日本は災害が多い国です。地震で家をなくしても、問題があっても助け合って努力を続けています。問題から逃げることはありません。だから、ネパールが 40 年かかってやっていることを５年もかからず、することができるのだと思いました。

また、お金がある人とない人で差別を受けることがありません。お店に入って、店員から対応を変えられることもありません。平等に接客してもらえます。

相手を尊重し、感謝すること。約束を守ること。間違えたら正直に話し、謝ること。これは私が日本に来て学んだことです。だから、日本は発展をしたのだと私は思いました。

ネパールは今、政治家の不正も多く、いろいろな問題を抱えています。でも、もし、ネパールの人々が日本のように問題から逃げず、努力を続け、約束をしっかり守ることができたなら、人だけでなく国も成長すると思います。国の発展が早くなると思いました。

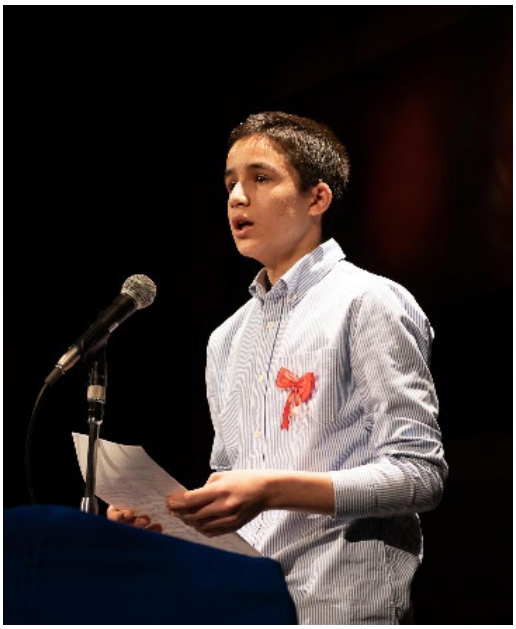
私はネパールが大好きです。外国に頼らず、ネパール人の手で国を発展させられるようにしていきたいです。私は、日本の大学で、法律と政治を勉強することが決まっています。必ず、日本の弁護士の資格をもって、ネパールに帰ります。目標から逃げず、努力を続け、将来、日本とネパール、両国の架け橋になる人材になろうと思っています。

私の発表は以上です。ご清聴、ありがとうございました。

（８）「ふるさとの海から考えること」
イムロン　アブドラモノフ

皆さんはウズベキスタンとカザフスタンの国境に位置するアラル海についてご存知でしょうか？その面積はかつて世界第四位にまで到達した広い青い海でした。日本のかたや、または多くの方にとってもよく知らない海だと思います。しかし今、その影響は世界中の人に及んでいます。本日はそのことを皆さんと一緒に考えたいと思いスピーチをしたいと思います。

かつてアラル海は僕の故郷のウズベキスタンの西側、カザフスタンとの間に広がる美しい



青い海でした。アラル海は地域の経済や生産の発展、農業や養鶏の発展で人々に仕事を与えたり、重要な役割を担っていました。当時は漁業が盛んで、最盛期には５万トンほど魚が取れる立派な海でした。

ですが、旧ソ連時代の無謀な灌漑(かんがい）政策のため縮小してしまい水が干上がり、今は消滅寸前の状態で、もう元の豊かな海には戻れないのです。その被害は皆さんが思うよりも深刻です。

土地の劣化と砂漠化、飲み水の不足、また栄養失調や、地元住民の健康被害と生活の悪化などが発生しています。また汚染された水は、地元の人々の健康に深刻な影響を与えています。妊産婦と乳児の死亡率は恐ろしいほど上昇していることが国連からも報告されています。そのような病気、栄養失調、貧困がこの地域を悩ませています。

水を失ったことで中央アジアの地域の気候は変動し、夏はより暑く、冬はより寒くなりました。干上がった地表に含まれている塩分や有害物質は砂嵐となり、中央アジアの国だけではなくヨーロッパの人々を苦しめ、南極まで行き氷も溶かし、海面上昇の原因にもなっています。

２０世紀最大の環境破壊と言われているアラル海問題ですが、母国のウズベキスタンは砂漠化防止のために２００万ヘクタール分の草を植えたり、被害を少しでも和らげるための努力をしていますがまだまださまざまな対策が必要です。

今、皆さんが知らない間に多くの海がなんらかの理由で消えていっているかもしれません。一度失った自然は取り戻せません。特に美しい海に囲まれている日本に住む皆さんに、このスピーチを通して僕の故郷にあるアラル海のことをもっと知ってもらいたいと思います。このような失敗を二度と繰り返さないためにも、また効果的な解決策を見つけるためにも、今直面している環境問題を知ることがとても大切です。そして、私たちはどんな行動が必要なのか一緒に考え、持続可能な社会を目指して行こうではありませんか。

ありがとうございました。

（９）「感謝」

趙 麗君（チョウ レイクン）

コロナが始まって、早いもので、もう３年が経ちました。皆さんは、コロナに対してどのような感情をお持ちですか。「怒り」や「不安」、「恐怖」でしょうか。私たちの生活を脅かす「厄介者」といった印象が強いかもしれません。でも、本当にそれだけでしょうか。

コロナが一国の問題ではなく、世界中の問題になったことで、人々は生活のスピードを落とし、足を止め、今まで見過ごしていた景色の美しさを発見し、挨拶もしなかった隣人との関係が良好になりました。また、思うように工場を稼働させられないことによって、地球が回復する機会となりました。CO2 排出量を減らして、自然の生活環境は良い方向に変化したという報告も耳にします。生活スタイルも変化するなど、大きな変化をもたらしました。

私にとっても人生の岐路になりました。私のコロナに対する感情は、「感謝」です。コロナが始まったころ、私は中国の専門学校に通っており、毎日、時間を無駄にしながら過ごしていました。将来の目標もないし、やりたいこともない。人生の意味も、生きる意味も見いだせない日々を送っていました。そんな時、コロナが始まりました。自分を取り巻く環境が激変しました。ゼロコロナ政策で、外にも行けない毎日が続き、コロナの前以上に私の気持ちは落ち込みました。ただでさえ、腐っていたのに、さらに腐った私を見た母と姉から「このままの状態で何となく毎日を送るか。日本へ留学し、もう一回勉強するチャンスを得て、輝かしい人生を送るか。」と言われ、初めて将来のことを考え始めました。

「そんなルーズな人間になるといいのか。」「毎日、ご飯、ゲームばっかりで本当にいいのか。」「明るく輝く人生を歩みたくないのか。」と心の中で何度も問いかけました。何日も何日も考え、それで日本留学を決意しました。でも、父は反対でした。私はアルバイトもしたことがなく、親に頼り切った生活をしていたので、信用がなかったからです。

そこで私は、父の仕事を手伝うことにしました。毎朝３時に起き、夜の７時まで田植えを手伝いました。毎日、14 時間労働です。朝は寒く、疲れ果てましたが、あきらめずに手伝う私を見て、父はこれなら大丈夫を安心し、日本留学を許してくれました。

周囲から勧められたレールの上を歩いているような人生だった私にとって、父の仕事を手伝った日々は、初めて自分のために自分の力を使って努力したことでした。

日本に来てからは、毎日、勉強とアルバイトで大変です。日本に来た意味である大学受験の準備もしなければなりません。でも、楽しい毎日です。目標もあります。自分の力だけでとは言いませんが、自分の足で歩いている感じがしました。そして、もう一度チャンスをくれた親への感謝の気持ちも生まれました。

コロナが始まったことで、私は立ち止まって自分の人生を考えるチャンスを得ました。そして、自分で道を決め、決定する機会をもらいました。そのチャンスをくれた親のことを考

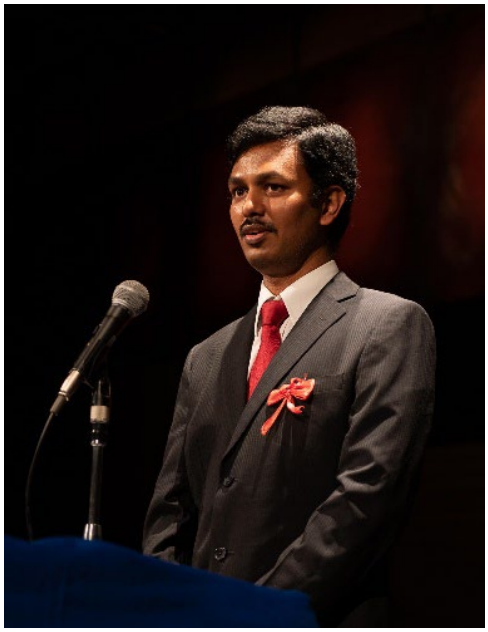
えることができるようになりました。コロナがなかったら、私は日本に来ていなかったかもしれません。

多くの人にとって、コロナは当たり前だった日々を取り上げる悪魔のような存在かもしれません。でも、コロナは私に人生を考えるチャンスをくれました。新しい選択をする機会をたくさん与えてくれました。自分の人生を良くも悪くもするのは、結局は環境ではなく、自分の心ひとつだということに気づかせてくれました。

一念発起する機会をくれたコロナ。そして、私の歩く道を応援してくれる親への感謝の気持ちを忘れずに、これからも自分の道を歩いていこうと思います。

（１０）静かな国日本

ディネッシュクマル　プラバカラン



初めて日本に来た時「日本はどんな国ですか。」と会社の人に聞きました。会社の人は「静かな国ですよ。」と答えました。「エー！？静か？？」と私はびっくりしましたが本当でした。東京は大きいビルも優れた技術も期待していた通りだったのですが、驚いたのはその静かさでした。東京は世界で一番大きな都市でラッシュアワーで人がいっぱいでぎゅうぎゅうなのに誰もおこっていないのです。誰も話さない。誰も電話しない。私だけ大きい声で電話でおしゃべりをしていました。「どうして！！？みんな、なんで黙っている？ロボットみたい。」「私はロボットの中にいますか。」と思うぐらいでした。なぜならインドでは、いつもどこにいても「名前は何ですか？」「どこに住んでいますか？」「どこに行きますか？」「ビスケット食べますか？」と知らない人としゃべっていますから。

インドには 25 ぐらい言語があります。その中で私はタミル語を話していました。タミル語は‘あ‘から始まります。日本語と同じですね。それに‘あかさたな‘の順番も同じです。私が生まれたインドの町チェンナイで、日本語とタミル語の関係について行われた会議がありました。そこで、昔のタミル語と日本語が５００ぐらい同じ意味の同じ言葉があると言われました。例えば「ぐるぐる」や「こそこそ」もタミル語にあって、意味も日本語と同じです。

言葉の順番も同じです。インドから日本に来たダルマというお坊さんが、日本語の文法のために貢献したからタミル語に似ているようです。そのお坊さんが日本の赤い人形のダルマ

さんだそうです。この話を知った時、私は嬉しかったです。日本語が近く感じられ、どんどん上手に話せる気がして楽しくなりました。ダルマさんに感謝します。

日本人にとって、話す言葉は、砂漠にいる人の水と同じです。とても大切に使っています。言葉は武器にもなります。人の心を傷つけます。日本人が知らない人にも目上の人にも、敬語を使うのは、言葉を大切に使うことを知っているからなんですね。日本人はロボットじゃなくて、周りに迷惑をかけないように気を遣って静かにしているのだと思います。エレベーターの中でも、病院の待合室でも静かにしています。

それから私は、話し上手より聞き上手のほうがいいということもわかって感動しました。今は私も迷惑をかけないように静かにしています。本当です。でも、インドの友達は信じません。私は静かな日本へ友達を呼んでびっくりさせたいです。そして、話し上手しかいないインドに帰ったらこの素敵な「静かさ」を広めて、日本人のように言葉を大切に使って言葉で英雄になりたいです。

（１１）「あこがれの国」
OBLOKULOV RAVSHAN（オブクロフ ラウシャン）

日本は母のあこがれの国でした。

国にいた時、テレビで日本のドキュメンタリー番組が放送されていました。日本のテクノロジーや生活、自販機や ATM など、様々なことが紹介されていました。それを見た母が日本に興味を持ち、機会があれば日本へ行ってみたいと言った事で私も日本に興味を持つようになりました。ネットでいろいろ調べました。男性だけでなく女性も学生も仕事をしていて、みんなが忙しい生活をしているのは、ユニークだと感じました。それで、日本語を勉強し、日本へ留学したいという夢を持つようになりました。そして、両親を日本へ招待し、私が日本を案内するという夢を持ちました。でも、それを実現するのは大変でした。ビザ申請をしましたが、いろいろな問題があり、書類が通らず、ビザがおりませんでした。周囲の人からは同じアジアだけど、宗教も違うし、人々の考え方も生活レベルも違うから、日本留学は無理だと言われました。私の夢を実現できると信じず、馬鹿にされました。でも、あきらめずに、再度挑戦しました。ビザが下りた時は、最高にうれしかったです。

成田空港に到着した時は、ただただ緊張していました。人が多く、国とは全然景色が違い

ます。新聞奨学生として日本へ来たので、最初はバイクに乗ることから慣れなければいけませんでした。仕事の内容も覚えられないので、仕事ができなかったので、節約生活を送らなければならないなど、辛い１か月でした。心が折れ、国に帰ろうと思ったこともあります。母のあこがれの国である日本。私の夢だった日本。なのに、日本人は、家族や親せきを大切にしない。家族より仕事。仕事のことばかりで、朝から晩まで仕事のことしか考えていない。そんな印象を持ちました。新聞社の人とも仲良くなれない。親切ですが、よそよそしい。寂しい毎日でした。

そんな中、私は風邪をひきました。熱を出したのに、お金もないし、どこの病院へ行けばいいのかもわからず、病院にも行けませんでした。何もわからない、できない状態でした。そんな時、新聞社の店長や同僚は、薬を買ってきてくれ、病院へ行くお金も貸してくれました。「日本人も外国人も同じだ。日本人は差別しない。みんな同じ人間だから、心配しなくていい。」と言ってくれたのです。そして、私のことを考えて、私を外国人だと思わず、自分の兄弟のように世話をしてくれました。うれしかったです。

その日から、私の日本人への印象は変わりました。その時まで、私はそのような親切を期待してはいませんでした。外国人である私を助けてくれることなんてないと思っていたからです。でも、それは、間違いでした。私の周りの人々は、私に優しさを示し、困難な時期に助けを、兄弟のように私を支えてくれました。

先入観をもって日本人を見ていたのは、周りの日本人ではなく、私自身だと気が付きました。私が壁を築いていたのだから、日本人のほうも壁が取れるわけがありません。先入観という壁を新聞社の店長や同僚は、打ち壊して、手を差し伸べてくれました。日本人へ敬意の気持ちが無限に高まりました。

周囲のサポートのおかげで、私は今では日本の生活に慣れ、日本を第二の故郷だと思うようになりました。

日本に来て、もう二年になります。この間に生活スタイルも考え方も大きく変わりました。もうウズベキスタンにいたラウシャンはいません。たくさんの友人を作りました。私は、日本でホテルの勉強をし、帰国後は、お客様への気配りやリスペクトを取り入れたサービスをもつ日本のようなホテルを開業したいと思っています。日本の秩序や規律の高さはすばらしいものがあります。日本人の生き方を学び、よいところを自分の国に持って帰りたいと思っています。

４．会場見学者とスピーカーとの交流会

玉川大学小林亮教授のご指導のもと、玉川大学ユネスコクラブの学生さんの協力により、スピーカーを囲みながら、文化や習慣の違いからくる面白い経験や苦労話についてお話をしました。

5．審査委員

審査委員長	東京インターナショナルスクール理事長	坪谷　郁子
審査委員	日本中近東アフリカ婦人会会長	小池　那智子
審査委員	国連大学サスティナビリティ高等研究所事務総括	横井　彩
審査委員	港区教育委員会事務局生涯学習スポーツ振興課長	竹村　多賀子
審査委員	新橋赤レンガ通り発展会会長	鈴木　徹雄
審査委員	港ユネスコ協会会長	田部　揆一郎

６．コンテストの審査基準

１．自分の思いや考えが伝わってくるか
２．未来に向かって頑張る姿勢が伝わってくるか
３．日本人や日本文化に対する新鮮な見方、考え方があるか
４．異文化に対する理解の有無
５．感動できる内容
６．全体的印象として、態度、発音、コミュニケーション

７．審査結果

坪谷郁子審査委員長より、以下の通り受賞者の発表が行われました。

最優秀賞	Bhatt Suresh
港ユネスコ協会会長賞	Oblokulov Ravshan Sobirjon Ugli
港区長賞	Dineshkumar Prabakaran
港区教育長賞	趙　麗君
審査員賞	李　俊憙
優秀賞	イムロン　アブドラモノフ
優秀賞	ギュリ　キム
優秀賞	杜　建奥
優秀賞	Hla Yamin OO
優秀賞	Dhea Ceicarya Ferennita Langitan
優秀賞	ガネッシュ　ミテュラン
会場特別賞	Bhatt Suresh

8．表彰式

「最優秀賞」の受賞者には坪谷郁子審査委員長より賞状とカップが授与、また「港ユネスコ協会会長賞」には田部会長より、「港区長賞」および「港区教育長賞」には浦田教育長より賞状とカップが授与されるなど、すべての入賞者に賞状とカップまたは楯が授与されました。

また、会場で視聴された皆様の投票により選出された会場特別賞には賞状と記念品が授与されました。

９．閉会の辞

港ユネスコ協会相談役　菊地賢介

本日は港ユネスコ協会主催第六回日本語スピーチコンテストの開催にあたり港区教育委員会をはじめユネスコ関連団体地域団体のご支援ご協力のもと無事に終了出来ましたことに厚く御礼申し上げます。

参加した 11 名の一人ひとりのお話が心に沁みるスピ-チばかりでした。

合わせて会場の皆様も参加者全員のスピ-チを熱心に耳を傾け会場が一体となりとても爽やかなスピーチコンテスト会場にして頂きました。

スピーチコンテストに参加頂いた 11 名の皆さんもきっと今日の気持ちを佳き思いでとして末永く記憶にとどめて頂けることと思います。

改めて武井雅昭区長、浦田幹男教育長、東京インターナショナル坪谷郁子理事長をはじめ審査委員をお勤め頂いた皆様、そして玉川大学小林亮教授と玉川大学ユネスコクラブの皆様に深く感謝申し上げます。

10. ひとこと

港ユネスコ協会 副会長　今村孝子

日本は経済成長と共に外国に並ぶようなステイタスを得たかに見えましたが、批判も受けなくてはなりませんでした。経済戦争で平和は簡単に手にはいらないこともわかりました。

人間が生きていくには、日常生活においても、経済生活においても、人と人とが信頼を得ることからはじまっているということを考えると、このコロナの中でも１対１の存在や出会いの大切さが必要であることを知ることになりました。

ユネスコの理念にあるお互いのコミュニケーションの大切さは『言葉』が基準にあることもわかりました。

そんな時代に当をえて日本語スピーチコンテストは ６ 回を迎えました。ひとえに港区のお力添え（区長と教育委員長のご出席）そして審査員の皆様方のご協力、事務局と委員会の周到な準備や委員長の采配、多くの視聴者の皆様方の参加、玉川大学のファシリテーターの皆様の熱いお働きのたまものです。

こうした会が開催できる港ユネスコのコミュニケーションの力は回数を重ねて必ず世界の平和に役立つに違いないと誇らしく思いました。

港ユネスコ協会

港ユネスコ協会　検索
〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3
電話：03-3434-2300
受付時間：火曜日～金曜日（祝日を除く）

16-3, Shimbashi 3-chome, Minato-ku, Tokyo 105-0004, Japan
(Minato-city Lifelong Learning Center)
Tel (03) 3434-2300
Open 10:00 to 17:00, Tuesday through Friday
(closed on national holidays)

ユネスコとは：国際連合の専門機関の一つ、国際連合教育科学文化機関（United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization）のことです。

港ユネスコ協会は、港区を拠点とし、ユネスコの理念に賛同して教育、文化にかかわる様々な活動を行っています。

United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization

UNESCO NGO JAPAN
MINATO